

『星の王子さま』

A・サンテグジュペリ 著

(内藤 濯訳)

岩波書店, 1953

I 星の王子さま

サンテグジュペリは、1900年に生まれ、1944年にナチスと戦い亡くなっている。パイロットとしての彼自身の体験をもとに、『夜間飛行』(1931), 『人間の大地』(1939), 『戦う操縦士』(1942)などの小説を発表している。なかでも、1943年に書かれ、フランスでは1946年に遺作として出版された『星の王子さま』は、今も多くの人に読まれている。

王子さまは、自分の小さな星にバラの花を残して旅に出る。命令するのが好きな王様、つねに他人から感心されたいと思っているうぬぼれ男、酒飲み、金もうけに忙しい実業家、命令を守る(命令に逆らえない)点燈夫、部屋にとじこもりっきりの地理学者たちと王子さまは出会い、そして地球にやってくる。

ここでは、この王子さまの話をたどりながら、自分の心のなかにいる子どもや大人に出会い、青年の心と人間関係について考えてみたい。

1. 山あらしジレンマ

フロイト(1921)は、19世紀の哲学者ショーペンハウエルの寓話をもとに「山あらしジレンマ」について述べているが、王子さまとバラの花との関係もまさにそうである。

〈星の王子さまのバラの花にもトゲがある。花は

咲いたかと思うとすぐ、自分の美しさを鼻にかけて、王子さまを苦しめはじめました。王子さまは本気で花を愛してはいたのですが、すぐに花の心を疑うようになりました。花がなんでもなく言ったことを、まじめにうけて、王子さまはなさけなくなりました。しかし王子さまは地球に着き、主人公のパイロットに、次のようにうちあける。「花から逃げたりしちゃいけなかったんだ。ずるそうなふるまいはしているけど、根はやさしいんだということを、くみとらなけりゃいけなかったんだ。花のすることったら、本当にとんちんかんなんだから。だけどぼくは、あんまり小さかったから、あの花を愛するってことがわからなかったんだ」)

青年は孤独である。家族や友人といえども、独りぼっちで寂しさを感じる時がある。だからこそやさしさや愛情を求めると同時に傷つくのも恐ろしい。親密な感情関係(親子・友人・恋人・夫婦関係)の間にも、いや親密であるからこそ傷つくことも大きい。しかし私達は相手のトゲに敏感ではあるが、実は私達一人ひとりがトゲを持っていることを忘れがちである。例えば、落ち込んでうつ状態の人に対して、善意のはげましが逆効果になることもある。また、自分のトゲをなくして、相手の期待にこたえようとするのは、とても危険である。身を守るためのトゲ・自己主張も、とても大切なことである。

このように温かさと痛さを知ったうえで、さま

さまざまな動きのある対人的距離の取り方を学んでいき、そしてかけがえのない人間関係を築いていくことが、青年期の課題の一つである。

2. かけがえのない関係

く地球の砂漠に着いた王子さまは、人間そして友達を探すうちに、バラの花の咲きそろっている庭を見つけ、大変寂しい気持ちになる。「ぼくは、この世にたった一つという珍しい花を持っているつもりだった。ところが、実は、あたり前のバラの花を一つ持っているきりだった。……ぼくはこれじゃ、立派な王子さんになれない」と、草の上につぶせになって泣きだした。そこへキツネがあらわれ、いつしか2人は仲良しになる。そしてキツネに「もう一度、バラの花を見にいらっしゃらぬ。あんなの花が世のなかに一つしかないことがわかるんだから」と言われる。王子さまはバラの花を見に庭にいき、キツネの言う通りであること、さらにこのキツネが王子さまにとって、「いまじゃ、もう、ぼくの友だちになってるんだから、この世に一びきしかいないキツネなんだよ」ということがわかるのである。

く別れのとき、キツネは王子さまに秘密をおくりものにした。「秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。つづけてキツネは次のように言う。「あんたが、あんなのバラの花をととても大切に思っているのはね、そのバラの花のために時間を使った(むだにした)からだよ。「人間っていうものは、この大切なことを忘れてるんだよ。だけどあんたはこのことを忘れちゃいけない。めんどうをみた相手にはいつまでも責任があるんだ」

ところで、能率(効率)的に時間をつかおうとしすぎて、時間に追われることはないだろうか。王子さまは言う。

く赤黒って先生がいてね、その先生、花のにおいなんか吸ったこともないし、星をながめたこともない。だあれも愛したこともなくて、していることといたら寄せ算ばかりだ。そして日がな一日、君みたいに、忙しい、忙しい、と口ぐせに言いながら、いばりくさっているんだ。そりゃ、人じゃなくて、キノコなんだ」

能率的に仕事や勉強をこなしていくことは大事である。しかし人間生活において、それだけが大事な訳ではない。たとえば、寄り道もせず決められた所に車で行くと便利で能率的である。しかし歩いて、ときには寄り道もして行くと、どこに着くか不確かだが、世の中がまったく違って見えたり、創造的な考えが浮かんだりするかもしれない。そしてこのように能率的に時間をつかうのではなく、その人独自に時間をつかうことが、その人の個性ということに関連してくるのである。

さらに、能率という観点からすれば、時間をむだにしているように思えるかもしれないが、私達はある人と一緒にいることや一緒に過ごすことを大事にしたいものである。かけがえのない関係を築くには、焦らずじっくりと時間をかけなければならない。

くキツネは王子さまに、仲良くする(絆を作る)には、「しんぼうが大事だよ。最初は、おれから少し離れて、..あんたは、なんにも言わない。それも、言葉っていうやつが、かんちがいのもとだからだよ。一日一日とたってゆくうちにや、あんたは、だんだんと近いところへきて、すわれるようになるんだ」と答えるとともに、いつでもかまわずやってくるのではなく、「いつも、同じ時刻にやってくるほうがいいんだ。..きまりがあるんだよ」とも述べている。

このキツネの答えは、看護師のシュヴィング(1940)が、精神病者のベッドのかたわらに数日間いつも同じ時刻に30分ほど静かに座り黙ってひかえていたことを、思いださせる。まさに人間関係の基本であろう。

3. 子どもの心

サンテグジュペリは『星の王子さま』の献辞のなかで、くそのおとなの人は、むかし、いちどは子どもだったのだから、わたしは、その子どもに、この本をささげたいと思う。おとなは、だれも、はじめは子どもだった(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない)と書いている。

あなたは、あなたが子どもだったころ、泥んこ

になって暗くなるまで遊んだことや、犬がライオンのように見えて怖くて足がすくんだこと、とても大切にしていた人形のこと、そしてとても悲しくなったりうれしくなったりしたことを、思い出せるだろうか。小学校に入学したとき、6年生や先生がそして校庭がとても大きく見えたことを、今でも覚えているだろうか。あるいは今、あなたはどんな夢をもっているのだろうか。木々の緑や花の香りを楽しんでいるか。放置されたゴミやさまざまな不正に対して、怒りを感じているだろうか。あなたは、受験勉強や仕事に心を奪われ、子どもの心や夢をなくしてしまっていないか。

4. 大人

〈主人公のパイロットが6歳のときにかいた、ゾウのみこんだウワバミの絵の思い出話から、『星の王子さま』は始まる。そして次の場面は、主人公がひとりサハラ砂漠のそれも人の住んでるところからおよそ千マイルも離れたところで、飛行機の故障をおこした時のことである。彼にとっては生きるか死ぬかの問題である。その夜が明けると、「ね……ヒツジの絵をかいて!」という声がある。これが主人公と星の王子さまのはじめの出会いである。何枚かかきなおした後、ヒツジが中に入っているという箱を主人公がかくと、王子さまの顔がぱっと明るくなった〉

主人公も星の王子さまも、うわべの、目に見えることだけで物事の判断をくだしたり、自分のことだけを考えている大人に対して、辛らつである。同様に、多くの青年が、自分の親は子どもの心がわかっていないとか、勝手であるなどと批判したり、親の言動やしぐさが無性に気にさわるときがある。あるいは、親だけでなく大人はみんな汚いとか、今の世はおかしいと鋭く批判する者もいる。これは、現実の親や社会と、自分の心のなかの理想的な親像や社会像とを比較し、その落差が急意識されてくるためである。

しかし青年自身も、現実の自分と理想の自分を比較したり、現実の自分の力と巨大な現実社会を比較し、傷つき無力感に襲われることがある。そして理想や夢を捨て、安逸に生活を送る者や、混乱と不安な日々を送る者もいる。

5. 王子さまと主人公

〈故障から8日目、貯えの水がなくなり、のどが乾いて死にそうな主人公と、王子さまは井戸を探しに行く。「砂漠が美しいのはどこかに井戸を隠しているからだよ……」と言う王子さまに、主人公は「そうか、家でも星でも砂漠でも、その美しくなさしめているものは目に見えないんだ」と言うと、「うれしいな、きみが、ぼくのキツネとおんなじことをいうんだから」と王子さまは応えた。そして主人公は、王子さまが眠りかけたので、両腕でかかえて歩きだした。僕は心をゆすぶられていました。まるで、こわれやすい宝を、手に持っているようでした。…僕はまたこう思いました。《この王子さまの寝顔を見ると、僕は涙の出るほどうれしいんだが、それも、この王子さまが一輪の花をいつまでも忘れずにいるからなんだ。バラの花の姿が、眠っている間も、ランプの灯のようにこの王子さまの心のなかに光っているからなんだ……》。…こんなことを考えながら歩いていくうちに、僕は夜が明けるころ、とうとう井戸を発見しました〉

ここで、主人公にとっての王子さまとの関係と、王子さまにとってのバラの花との関係が、重なりあうと考えられる。バラの花といざこざをおこして旅に出た王子さまが、キツネに出会い大きく成長をとげたように、〈飛行機がサハラ砂漠でパンクするまで、親身になって話をする相手がまるきり見つからずに、ひとりきりで暮らしてきた〉主人公も、王子さまと出会い大きく成長をとげるのである。2人とも、もはや独りぼっちではない。

〈次の日の夜、2人の別れである。主人公は機械の故障がなおり、人間の住む所へと帰れるようになる。王子さまも毒ヘビにかまれて地球で死ぬことによって、自分の星に帰ろうとする。王子さまのあの笑い声をきくことは、砂漠の中で泉の水を見つけるのと同じだ、と思う主人公に対し、王子さまは「たいせつなことはね、目に見えないんだよ……」と言う。…「夜になったら、星をながめておくれよ。ぼくんちは、とてもちっぽけだから、どこにもぼくの星があるのか、きみに見せるわけにはいかないんだ。だけど、そのほうがいいよ。きみは、ぼくの星を、星のうちの、どれか一つだと思ってながめるからね。

すると、きみは、どの星も、ながめるのがすきになるよ。星がみんな、きみの友だちになるわけさ。それから、ほく、きみにおくりものを一つあげる……。王子さまは、また笑いました。「ほっちゃん、ほっちゃん、僕、その笑い声をきくのがすきだ」。「これが、ほくの、いまいったおくりものさ。ほくたちが水をのんだときと、おんなじだろう」。王子さまは、また笑いました。「それに、きみは、いまにかなしくなったら——かなしいことなんか、いつまでもつづきゃしないけどね——ほくと知りあいになってよかったと思うよ。きみは、どんなときにも、ほくの友だちなんだから、ほくといっしょになって笑いたくなるよ」

人間は、(星でもバラでもキツネでも同じことだが)無数に存在する。その中からこの世に一つしかないものとして、かけがえのない関係が結ぶるとき、その他の無数の人間に対しても、人は開かれた気持ちになれ、世の中が喜ばしいものと感じられる。

II 子どもの心を持った大人

星の王子さまとは何者だろう。もちろん、現実の世界に実在する人物ではない。私達の心のなかに存在しているのではないか。私達の心のなかの「子ども」である。その「子ども」は星の王子さまとしてだけでなく、他の童話や児童文学、映画やマンガなどの登場人物としてあらわれたり、個人的な思い出や思いとして存在したりする。そして人はその子どもたちと出会い、関係を結び、視野を広げ、体験を深めて成長していく。

大人になることに悩み、不適応感をいだいている青年に対し、本人もまわりの大人も、一方向的に、子どもであることをやめ大人になることを期待し要求しがちであるが、一層焦るだけで逆効果になることが多い。むしろ信頼しあえる友人や大人との交流を通じて、自分自身のペースに従い、子ども心に帰り、無為な状態にとどまったり、さまざまな遊びをしたり、自分の可能性をためして試行錯誤することによって、生き生きとした好奇心と想像力そして希望を取りもどし、人間関係を体験しなおすのである。

それから次に、大人の知恵を主体的に学び、責任を身につけていくようになる。

現代において「大人」であるとは、確固とした伝統や規範を内在化しているだけでなく、変動する社会や他者に対して開かれた姿勢で、つねに自己変革をなしうる人であろう。そのためにも、大人は子どもの心を失くしてはならない。

最後に。臨床心理士や小中学校の教師でありながら、星の王子さま、そしてモモやトトロを知らないなら、その人は自らの人生について考え直すべきではないだろうか。私たちは、子どもの心と大人の知恵を大切にしたいものである。

- 注1) 筆者は、1992年に「星の王子さまと青年心理」を記し、『カウンセリングの知と心』(1994, 日本評論社)に所収したが、現在この拙著は絶版になっている。本文は、「星の王子さまと青年心理」を修正したものである。
 注2) テキストは内藤訳を用いたが、池澤訳を参考にして、筆者が翻訳した箇所もある。
 注3) < > は要約したことを示し、「…」は中略であるが、できるだけ原典に忠実になるように努めた。

文 献

- Estang L (1956, 1989 / 山崎庸一郎訳, 1990) サン＝テグジュペリの世界—星と砂漠のはざまに. 岩波書店.
 von Franz M-L (1970 / 松代洋一, 椎名恵子訳, 1982) 永遠の少年—「星の王子さま」の深層. 紀國屋書店.
 Freud S (1921 / 小此木啓吾訳, 1970) 集団心理学と自我の分析. In: フロイト著作集6—自我論・不安本能論. 人文書院, pp.195-253.
 河合隼雄 (1983, 1996) 大人になることのむずかしさ—青年期の問題. 岩波書店.
 宮田光雄 (1995) 大切なものは目に見えない—『星の王子さま』を読む. 岩波書店 (ブックスレット).
 村瀬嘉代子 (1981) 子どもの精神療法における治療的な展開—目標と終結. In: 白橋宏一郎, 小倉清編: 児童精神科臨床2—治療関係の成立と展開. 星和書店, pp.19-56, 247-254. (村瀬嘉代子著 (1995) 子どもと大人の心の架け橋. 金剛出版, 所収.)
 de Saint-Exupery A (1946) Le Petit Prince. Gallimard. (内藤濯訳 (1953) 星の王子さま. 岩波書店 (少年文庫) / 池澤夏樹訳 (2005) 星の王子さま. 集英社.)
 Schwing G (1940 / 小川信男, 船渡川佐知子訳, 1966) 精神病者の魂への道. みすず書房.
 塚崎幹夫 (1982) 星の王子さまの世界—読み方くらべへの招待. 中央公論新書.